

# スピードキュービング 競技人口拡大ビジョン **2024/2030**

2023年2月1日

代表理事  
大村周平

一般社団法人  
スピードキュービングジャパン



## スピードキュービングの 健全な普及と発展

**競技人口** (SCJが関与する大会やイベントへの参加者数) を  
「普及と発展」の測定可能なKPIとして設定する。

## スピードキュービング大会の 申込み競争激化

受け入れ可能な参加枠に対して大会参加を望む競技人口が多く、  
申込みが非常に短時間の先着レースとなってしまっている。

現行のWCA規約では先着順が要求され、  
このバランスを適切に分配する手段がない。

新規競技者の参入障壁が高く、  
競技人口の健全な流動を阻害している。

## 潜在的競技人口の 取りこぼし

パズルの知名度や販売数、SNS投稿などから推測される潜在的競技人口に対して、実際の競技参加者が非常に少ない。

各地に広がっている需要にリーチできておらず、  
**競技文化成長のチャンスを逃しつづけている**

## 短期ビジョン 2024

まず目の前の競技人口を見据え、  
WCA大会をはじめとする各種大会、イベントの定員を増やす施策を展開する。

## 中期ビジョン 2030

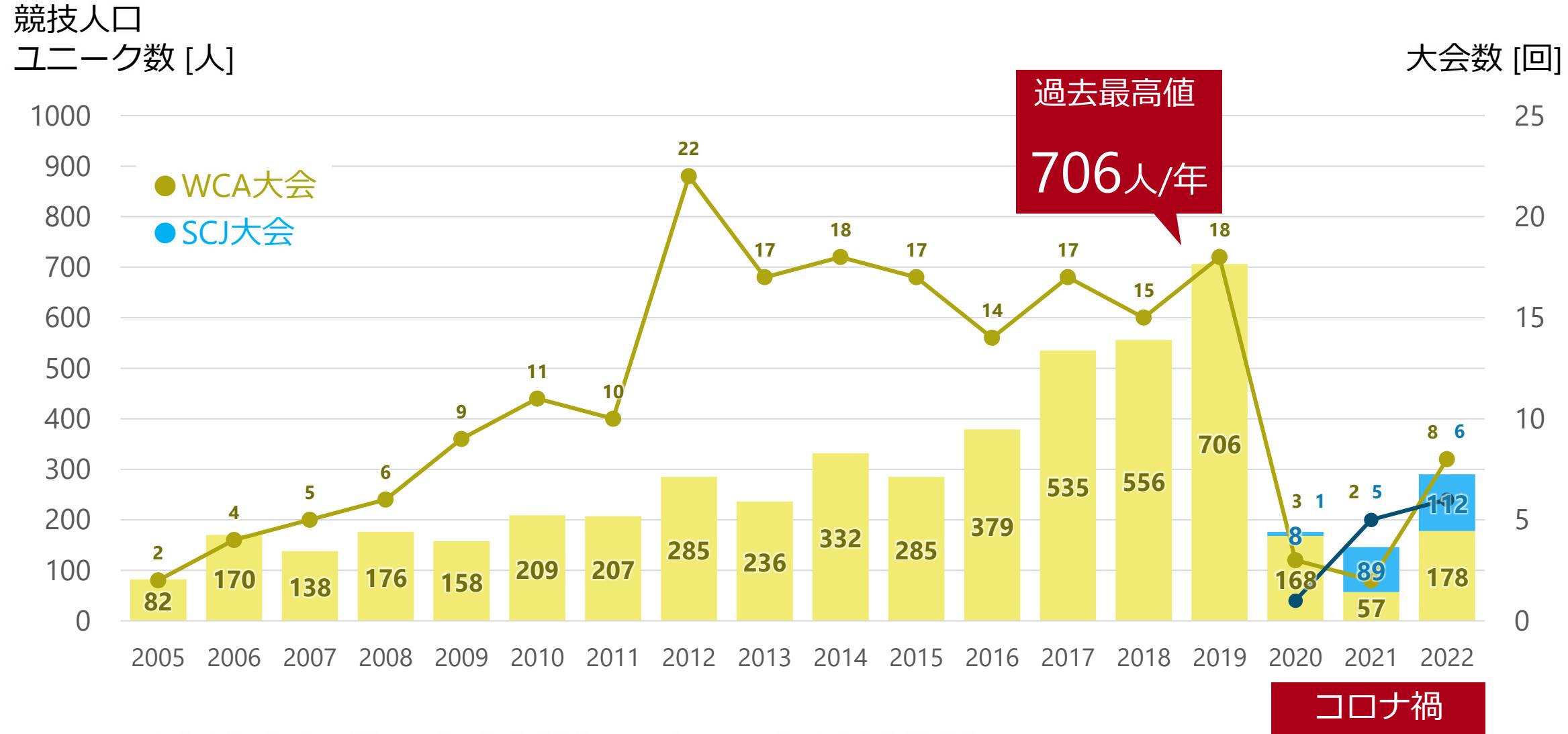
競技人口の桁が増加した将来像を大胆に描き、  
既存の大会観にとらわれないスピードキュービング発展のビジョンを掲げ、  
トライアンドエラーを繰り返しながら  
新たな方向性へと舵を切る

# 短期ビジョン 2024

**2024年  
競技人口 ユニーク数  
年間 1,000人**

ユニーク数では、  
同じ人が複数回参加しても、同年内なら 1 とカウントする

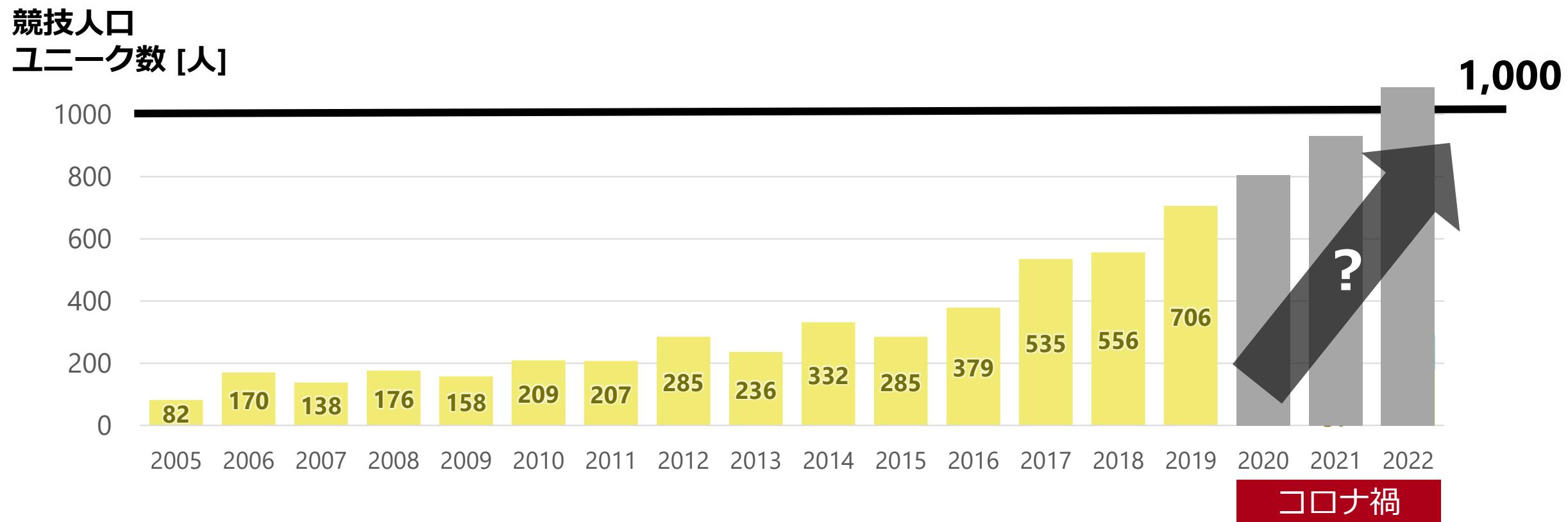
# これまでの日本国内 大会参加者数の推移



# 1,000人達成は見えていたのか？

9

一見すると、  
コロナ禍さえなければ順調に達成できたように見えるが…



# 規模感にそぐわない運営体制の限界

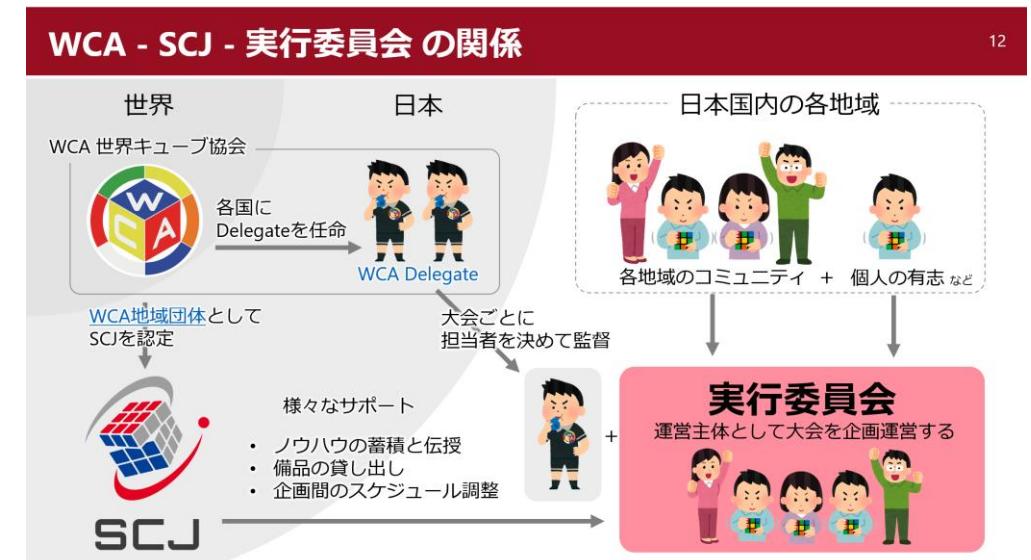
2019年は過去最大の競技人口を記録した一方で、従来の大会運営手法の限界があらわになつた年でもあつた。

日本大会 2019 (合計274名参加, 3日間の連日開催) に代表される大規模大会は互いに顔見知りであることを前提とする黎明期特有の身内文化ではなくなつた。

特定個人のはたらきに過度に依存する運営体制はもはや通用せず、専任者不在のボランティア運営の限界を迎えたと認識。

SCJ発足以降、これらの経緯は現在WCA大会運用方針としている  
**WCA – SCJ – 実行委員会 の所掌切り分けにつながり、**

立場ごとの協力者をさらに増やすことで日本全体の総合的な企画運営能力を担保する。



100人規模  
1,000人規模

それぞれに適した運営体制は異なる

KPIを分解し、それぞれの向上に寄与する打ち手を考える

**競技人口  
ユニーク数**

=

**大会あたりの  
競技人口ユニーク数**

×

**大会開催数**

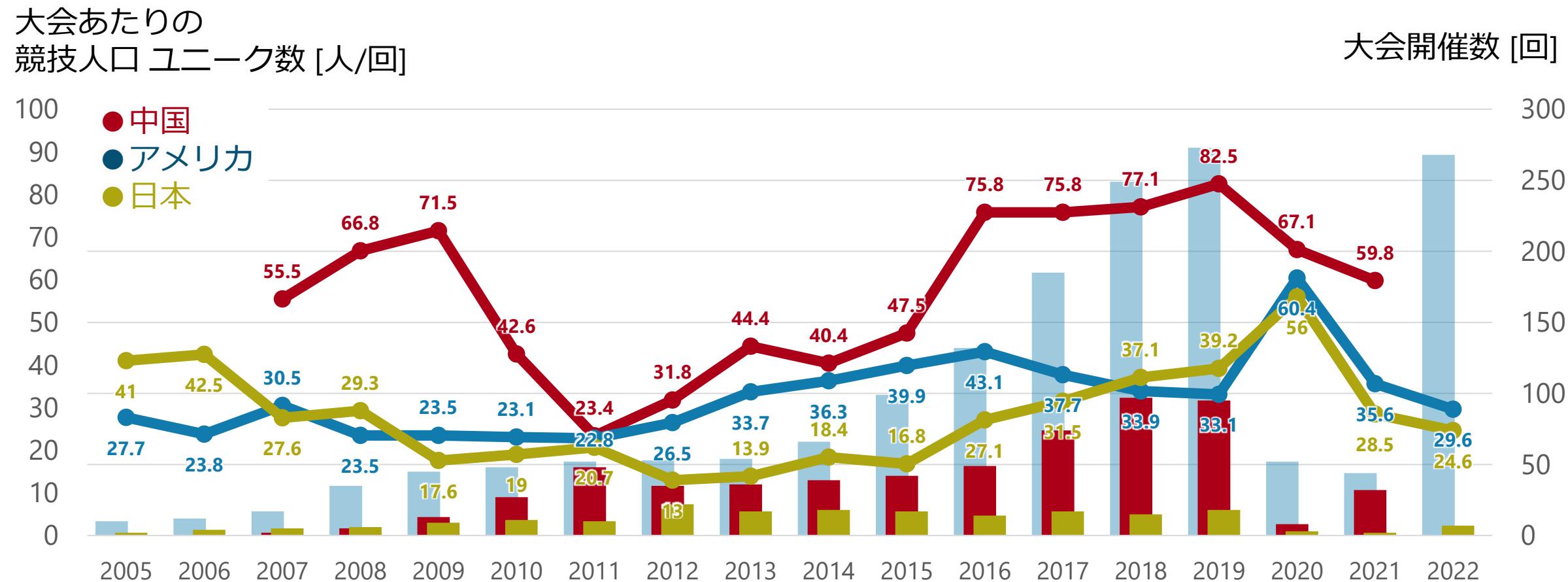
- 意図的な大会スケジュール重複  
同日、複数地域で大会を開催
- WCAシリーズ大会
- 大規模会場の利用
- 初参加者の割合増加

- WCA Delegateの強化
- 実行委員会の強化
- サポーターなど、  
多様な協力者の増員

# WCA大会 1回あたりの競技人口 ユニーク数

13

- ・ 大会の競技人口獲得効率は、世界最高の中国でも日本の2倍程度。
- ・ アメリカは年間大会数が日本の10倍だが、効率は大きく変わらない。



# WCA大会を補完するSCJ大会

14

WCA大会の競技人口獲得効率は、国ごとに大きく差がつくポイントではない。

居住地、年齢、年間参加回数など個人属性の  
参加基準利用を禁じる**WCA大会の特性は、**  
できるだけたくさんの大にに参加したいリピーターには歓迎されるが、  
過半数を占めるライト層のユニーク数獲得とは相性が悪い。

そこで、これを補うため  
追加の参加制限を導入したのがSCJ大会の基本理念となる。

競技人口  
ユニーク数

=

WCA大会  
競技人口ユニーク数

+

SCJ大会  
競技人口ユニーク数

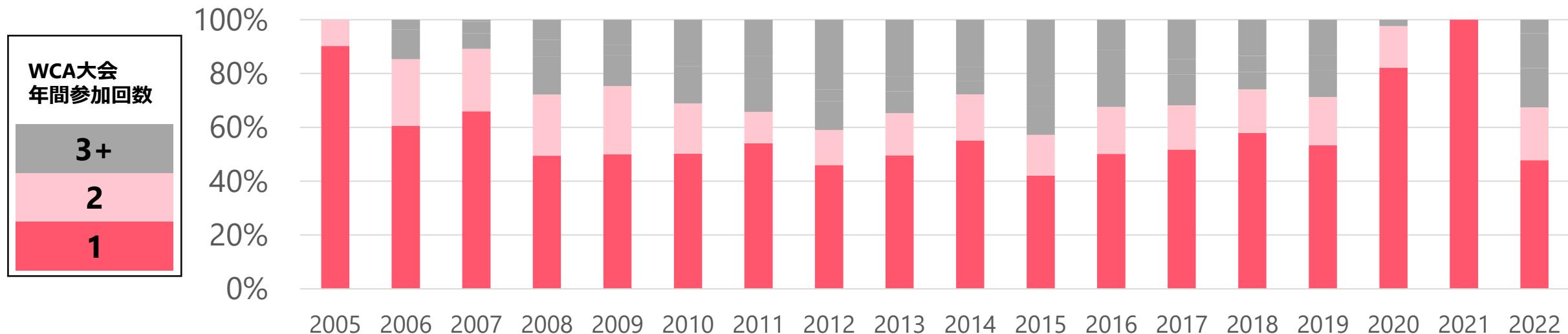
WCA大会に比べて、  
ユニーク数獲得効率が高い  
SCJ大会を設計

# 参加者と運営の垣根を低くする

WCA大会参加者の50% は年間1回のみ参加。1回+2回 で約70%を占める。

従来の大会は競技参加者自身による相互運営で成り立ってきたが、競技力ピーク層の若年化に伴い責任能力のある大人の割合が減り、競技人口の人間関係の中だけで大会を自給することが困難になった。

成年リピーターの運営関与はもちろん、非競技層（競技者の保護者など）からも様々な関係者の協力を促していかねば、大会開催数の増加は見込めない。

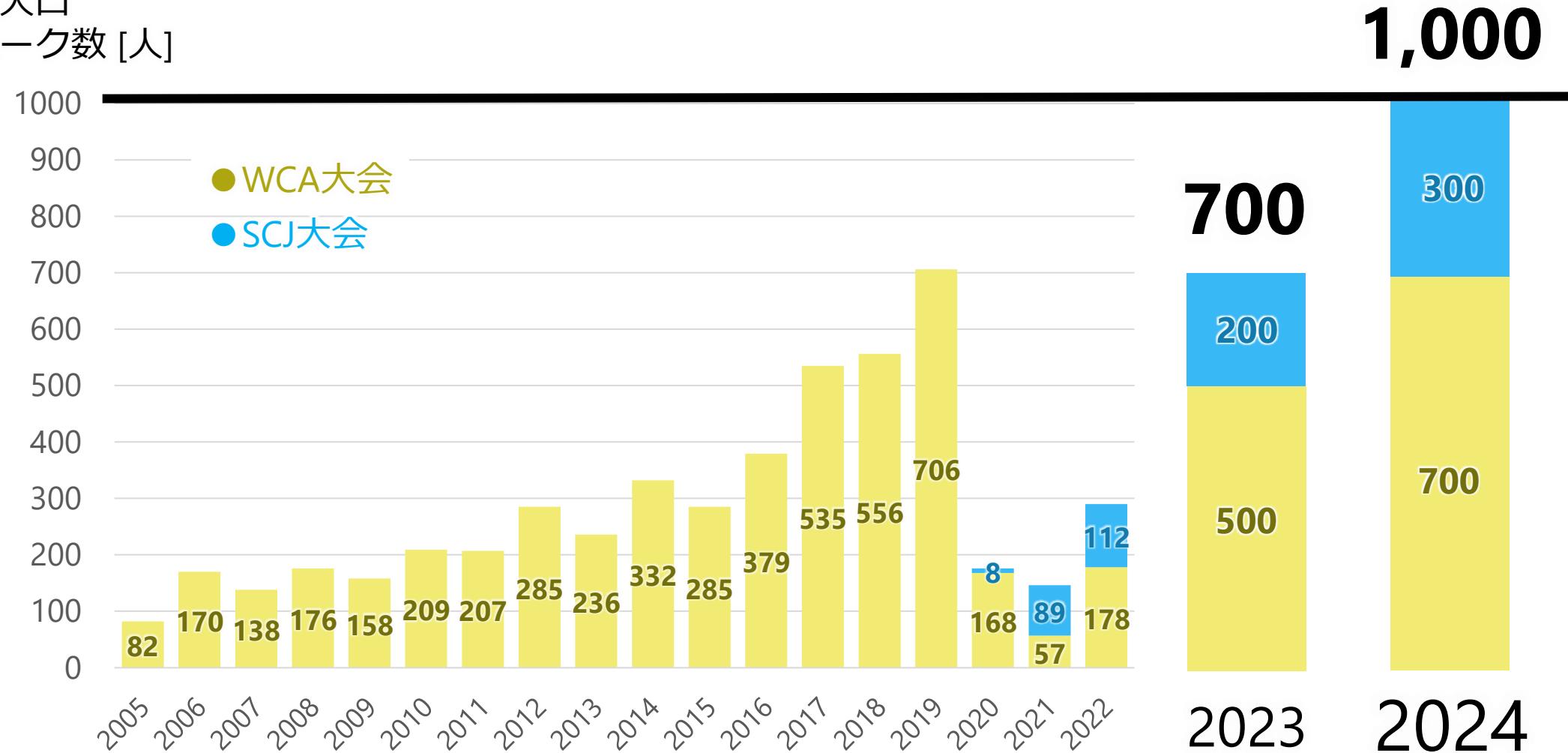


# 短期目標設定 2024年 1,000人

16

WCA大会 + SCJ大会の2本柱で、1,000人をめざす

競技人口  
ユニーク数 [人]



## 2023年1月時点

日本国内のWCA Delegateはすべて関東圏に在住。  
大会やイベントも関東に集中

## 2024年末のビジョン

北海道、東北、東海、近畿、中国、四国、九州のうち

### 特定の地域に注力し、

地域内での大会やイベントを開催できる

継続的な地域拠点を立ち上げる。

まずは地域ごとの競技人口を

可視化し繋ぐため、

**初心者を受け入れる交流会を推進する**



# 中期ビジョン 2030

1,000人で  
満足できるのか？

2030年

競技登録者 ユニーク数

年間 10,000人

# 10,000人の分布はどうなる？

21

SCJの活動範囲  
競技人口 KPI 設定範囲 **10,000 人**

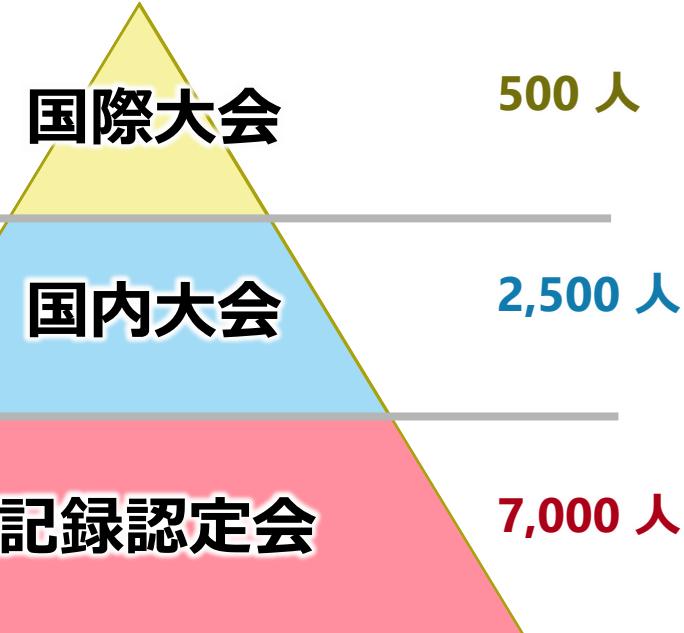
現行WCA大会の流れをくむもの。  
トップレベルの競技を牽引

現行SCJ大会を発展させ、地域/年齢など 属性ごとに展開  
日本選手権の開催

ランキング制を伴わない記録認定システム  
SCJが認める審判員による真贋保証つき認定証の発行

地域での交流会  
認定級、インストラクター制度の導入  
教育機関、介護施設などへの展開

**広くスピードキュービングを  
楽しむ人達**



WCA大会 / SCJ大会で行っているような  
**全競技者、全記録の保守管理は**そのデータ量が肥大化し、  
際限なく管理コストが増えていき、**持続困難**なことがわかつてきた。

そこで、運営コストの低い戦略として、  
記録の履歴管理やランキングを行わずに  
単発の記録賞発行のみを保証する枠組みを新設したい。

マス層の受け皿をこの記録認定会システムに位置づけ、  
従来のながれをくむ記録管理、ランキング付けの大会は  
上位選手に対して限定的に行うことで運営リソースを適切に配分する。

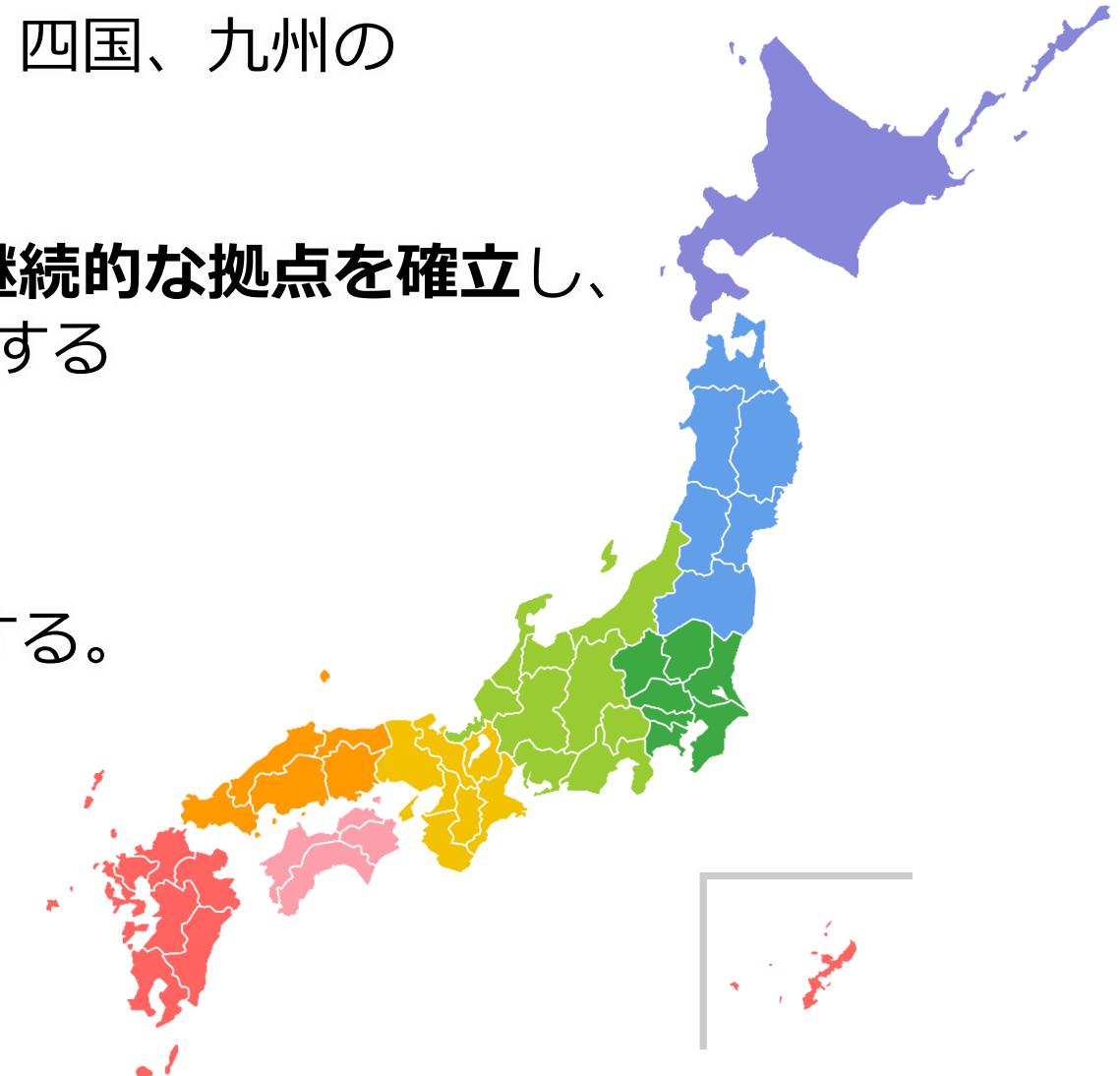
北海道、東北、東海、関東、近畿、中国、四国、九州の  
**すべての地方に、**

初心者を受け入れる交流会や

地域内での大会、イベント運営のできる**継続的な拠点を確立し、**  
SCJはそれらすべての統括機関として機能する

競技人口獲得のKPIを  
各地域の人口比に応じた目標として設定する。

各地域の代表が集まり、  
真の日本一を決める大会を開催する



2030年までにWCAは何かの活動方針転換を伴っていると推測し、これを前提にSCJの活動方針を考える。

2023年現在、  
スピードキュービングの競技人口増加に伴って、  
WCA内外から新たな国際的な枠組みの議論が始まっている。

その決定を受け身で待つのではなく、  
SCJが日本国内でスピーディに先行展開した施策からの  
フィードバックをもって  
新たなスピードキュービングのあり方を世界に向けて積極的に提案し、  
国際スピードキュービング文化における  
**日本の地位と名誉を高く保つことを目指す。**

一般社団法人  
スピードキュービングジャパン

